

2012年10月11日・下野新聞カラー版「文化」欄では

岩手の文学風土論じる

評論集『鬼古里の賦』 21年、50作品を収録

盛岡市在住の俳人^{かわむらようへい}川村香平さん(63)＝宇都宮市出身＝が岩手県内の俳人、歌人を中心にした評論集「鬼古里^{おにこ}の賦」を出版した。石川啄木^{いしかわたくぼく}や宮沢賢治^{みやざわけんじ}を生んだ盛岡に憧れ、同市に移って37年。学校法人勤務の傍ら岩手県の俳誌「草笛」や全国誌「古志」同人などとして作句を続け、評論活動も行っている。

本書は句集「羽音」、評伝「無告のうた・歌人・大西民子^{おおにしたみこ}の生涯」に次ぐ3冊目の著書。岩手県の文学風土を論じた「鬼古里の賦」や「北の俳人列伝」「北の歌人列伝」と白濱一羊氏^{しらはまいちよう}(俳誌「樹氷」主宰)との4章構成。盛岡を中心に、北の風土に徹底してこだわった。中央に対する北の気概と矜持^{きやうじ}が全体を貫いており、文学者の発掘に努めている。

「鬼古里」は盛岡市近郊の地名。

収録作品中最も古いのは「風土の幻影—山口青邨^{やまくちせいそん}試論」(1991年)。最も新しいのは「仲間の風土—中津川右岸」(2011年)。21年間に同人誌などに発表した約50本の作品を盛り込んだ。

青邨試論は「ホトトギス」「夏草」を中心に活躍した同市出身の“中央”俳人青邨の作品世界に切り込んだ。

みちのくを詠った青邨作品には「本来の風土性が欠けている」とする意見があるが、川村さんは「青邨作品に漂う写実の中の透明感は、…母郷盛岡への思慕であろう。しかも抱きしめ合うような関係の願望は、母と子のそれ以外にはないように思えるのである」と考察。「われ生れ母みまかれる五月かな」「母の忌の五月みちのくよからずや」などを例に「作品に母の姿があり、じつは母が実在しなかったという二重性、つまり写生のフィクション性にある」と解説している。

と紹介されています。